

フィリピンカオハガン島の子どもと生活の中での教育について学んだこと

今回私は2月24日から29日までの間、フィリピンにある小さな島カオハガン島へと行きました。初めての研修参加という事で、研修に参加することとなったメンバーと共にどのような活動が出来るのか、どんな学びがあるのかとても楽しみにしていました。

私は教育学科に所属していることもあり、子どもたちがどのような暮らしぶりを行っているのか、どのような教育を受けて育っているのかに視点を置いてこの研修に参加することを決めました。

私が実際に行ってみて感じた事を4つ紹介します。

(1) カオハガン島の人々は子どもをみんなで育てるネットワークが根強い習慣として残っているということ。

それは具体的にどのようなときに感じたかという、私がホームステイに参加させて頂いた際に、エルネストさんの子ども以外に近所の子ども達がいつも家の中にいて、食事を与えたりともに生活している光景がありました。

また、エルネストさんの子ども達も近所の家へお邪魔しご飯を食べ、家族のように過ごしている様子が見られました。

ホームステイ先の家族に初めて会ったとき、家の中には子どもが沢山いて誰がこの家の子どもたちなのか見当もつきませんでした。それほど家族以外の子ども達が馴染み、親しみがあるように思いました。写真はエルネストさん家族と近所の子ども達です。エルネストさんのお宅で撮影しました。



また、私と同世代の男の子が小さい赤ちゃんを抱いていたので「あなたのお子さんですか？」と質問すると、「ちがうよ、いとこだよ」と答えてくれました。この会

話をしたとき、一人の子どもを両親だけが育てるのではなく周りの親戚や近所の家族たちに支えられて大きな愛情を受け育っていくのだと感じました。

それに加え、兄弟の面倒をみる子どもが多くいました。

写真の女の子はホームステイ先の娘さんで一番下の妹をいつも抱きかかえ、お散歩にでかけたりあやしたりしていました。



小学校では、就学前の幼児を連れて登校している子どもも目につきました。このように、子どもをみんなで育てるネットワークが根強い習慣としてあることによって母親の育児に対する不安や負担を軽減させることができ、子ども自身も様々な人からの愛情を沢山受け健やかに成長できるよい環境だと思いました。

(2) 食を大切にするという食育の考え方が生活の中で学ぶことができるということ

生き物を育て、その命を頂くということは日本にいても分かってはいるながら、お店から買って来て食材を頂く生活をしている私たちにとってそれは身近なことではないと気づきました。

カオハガン島の子ども達にとって、命を頂くこと食べ物を大切にすることは私たちに比べて身近なことだと思いました。

この写真にもあるように、豚の屠殺を一番前で真剣に見ているのは子どもです。



なにも怖がらず、しっかり自分の目で豚の命がなくなるところを見ることで命を頂く事、食べ物を大切にする事を生活の中で学んでいくのだと思います。

(3) 無駄のない生活をしていたということ

ホームステイ先やその他の一般家庭には、冷蔵庫がありませんでした。

なので、食べ物は食事の準備の時に買いに行きます。

保存ができない環境にいるので、買いに行く食材も家族が食べる分だけで、油も使う分だけその時に買いに行きます。

この写真は一回分で売っている料理用油です。



日本にいたら今使わなくても買っておこうなどという考えから、無駄なものまで買ってしまふことがよくあります。

カオハガン島の人々は、ゴミも少なく無駄なものがない生活を送っているので環境にも家計にも優しく、私たちも学ぶべきだと思いました。

(4) 自然の中で生きているということ

カオハガン島の一般家庭では、当たり前ですがゲームやパソコンはありません。その環境でこども達は海で泳いだり、森の中に入り葉っぱや花を摘んで遊ぶ子どもが多くいました。

またこの写真のように、ヤドカリの貝を割り中身を針の先につけて魚釣りをしている様子も見ることが出来ました。



カオハガン島の子ども達は裸足で駆け回る様子をよく見かけました。

自然のものに肌で触れ合う機会も日本の子どもより多いのだと思いました。

この様子を見て、カオハガン島の子ども達は幼児の頃から自然の中で過ごし、自然の物に触れることで豊かな心と情操を育んで行くのだと感じました。